



書評

## 我住在日語：わたしは日本語に住んでいます。

温又柔 (2016). 『台湾生まれ 日本語育ち』白水社.

川上 郁雄\*

© 2016. 「移動する子どもたち」研究会. <http://gsjal.jp/childforum/>

### 1. はじめに

温又柔 (Wen Yuju) 著『台湾生まれ 日本語育ち』(2016年, 白水社)を読んで, 私はすぐにこの本が「移動する子ども」学の貴重な研究書であると思った。その理由を, 以下に述べてみたい。

ただし, 本書は温さんのエッセイ集であり, 研究書の体裁はとっていない。本稿のタイトル, 「我住在日語：わたしは日本語に住んでいます。」は, この本の帯に書かれていた一文であるが, 書名だけではなく, このキャッチーな文に, 私は胸騒ぎを覚え, すぐに手にとって読み始め, そして, 衝撃を受けた。そこには, 私たちが知りたいと思っていた, 幼少期より複数言語環境で成長した子どもの心情が生き生きと描かれていたからである。

はじめに著者を紹介しておこう。本の奥付には, 次のような解説がある。「温又柔 (おん ゆうじゅう) 作家。1980年, 台湾・台北生まれ。3歳の時に家族と東京に引っ越し, 台湾語混じりの中国語を話す両親のもとで育つ。2006年, 法政大学大学院・国際文化専攻修士課程修了。2009年, 「好去好来歌」ですばる文学賞佳作を受賞。2011年, 『来福の家』(集英社)を刊行。」

もうおわかりのように, 温さんは「移動する子ども」という記憶 (川上編, 2013)を持つ人なのである。生業 (なりわい) が作家であるせいか, 特にことばに関する観察眼が卓逸している。本書のタイトルが示すように, 「台湾語混じりの中国語」を聞きながら日本語で育ったという経験

\* 早稲田大学大学院日本語教育研究科 (Eメール: kawakami@waseda.jp)

や心情が豊かに記述されている。

本書の中で、温さんは自身が幼少の頃から現在までに経験したことをさまざまな文章で自由奔放に語っている。けっして時系列に並べられているわけではないが、私の関心にそって、つまり温さんが幼少期から大人になるまでのプロセスを追ってみよう。そして、温さんの事例から考えられることを、最後に考察として述べる。以下、かっこつきの引用はすべて本書からである。掲載ページ数は省略する。

## 2. 幼少期の移動とことば

「はじめて喋ることを覚えた頃、わたしは台湾にいた。」

「——チマァ、ワ・アイ・チャー、餅乾！

(今、わたしは、ビスケットが食べたいの！)

コトバに中国語と台湾語がまざるのは、幼いわたしに話し掛ける大人たちが、皆、そんなふう喋っていたからだ。」

「けれども喋ることを覚えたばかりのわたしは、(中略)聞こえてくるコトバの、どこからが中国語でどこまでが台湾語なのか区別しない。

台湾語かと思えば中国語。中国語かと思えば台湾語。

大人たちが状況に応じて使い分ける話し方を聞こえたとおりに、ただ真似していた。」

温さんは、この頃の自身の言葉は「台湾語混じりの中国語」であったという。周りの大人たちの会話を聞き、言葉を覚えていくのが得意で、「口達者でうるさいわたし」だったという。温さんは、台湾の、このような言語環境で幼少期を過ごしたのち、3歳になって、家族とともに東京へ移動する。東京で暮らすときも、家庭では両親の「台湾語混じりの中国語」で育った温さんは、5歳になって幼稚園に行くようになると、「おうちの外(=幼稚園)で鳴り響いているコトバは、それまでずっと馴染みのあったコトバとは全然異なる響きを持つもの」であることに気づいていく。

「わたしは五歳の年の春、自分の中で定着しつつあった中国語(+台湾語)とはまったく異なる、日本語という新しいコトバの中に投げ込まれたのです。

お喋りだったわたしは、すっかり無口になりました。」

そんな温さんに、両親はテレビで『ドラえもん』など日本のアニメ番組を見せ、日本語を吹き

込んだ。そうすると、

「半年も経つと、ドラえもとのび太がしているような会話を、幼稚園の友だちとするようになりました。友だちとの会話に慣れてくると、アニメの中ののび太たちの会話をもっと理解できるようになりました。こんなふうにしてわたしは、音としての日本語をぐんぐん吸収していきました。」

この頃、温さんが考えていた、ことばに関するエピソードも秀逸である。

「——ゴメンネは自分よりも小さい子、ゴメンは自分と同じ歳の子、ゴメンナサイは先生にむかって言うもの」

「中国語では「對不起」と言えば済むところを、日本語では相手によって「ごめんね、ごめん、ごめんなさい」と使い分けなければならない——わたしは、おおげさに言えば、日本語のルールというか、秩序といったようなものを会得しつつあったのです。」

小学校へ入る前の幼少期の子どもは、一般に認知発達の初期段階にあるため、言語を客観的に認識することが難しいといわれるが、温さんは自分のことば、そして相手のことばについて子どもながらに「考察」していたということは、複数言語環境で成長する子どもの認知発達を考えるうえで注目される貴重な事例であろう。

小学校に入学すると温さんは日本語をますます習得していく。特に、書くことに関する記述が興味深い。

「小学一年生のときの「あのね帳」を捲ると、こんなふうにある。  
——わたしは、きょう、本を、かいました。あと、コーラを、かいました。いもうとと、のみました。おわり。」

読点だらけのわたしの作文に「とてもたのしいじかんだったんだね」と赤いサインペンで寄り添う文字には優しさが滲んでいる。」

と担任だった K 先生からの「お返事」が嬉しくて、書くことに夢中になっていったという。さらに、

「わたし自身は、書くことがただもう楽しかった。そして、文字とは、日本語をあらわすためのものだと思込んだ。たとえば、「還在睡覺！キンキャイ」という母のコト

バを、誰に言われるでもなく、「まだねてるの、はやくおきて！」と頭の中で置き換える。まるで「翻訳家」のように、母の放つ中国語や台湾語を日本語に「整えて」から、「書く」のだ。おかげで、わたしの文にあらわれる母は、本物の母よりずっと日本語が流暢だった。」

その後、温さんはますます日本語が上達していく。

「いつしかわたしは、家族といるときも日本語だけで喋るようになっていた。両親から話しかけられるコトバはみんな聞き取れるのだけれど、自分のほうから中国語や台湾語を話す機会はぐっと減った。」

### 3. ことばについての思い——中国語、台湾語、日本語

子どもの頃の（そして、今もそのようだが）温さんの母親の言葉は、中国語と台湾語と日本語の混ざる「ママ語」だと温さんはいう。「ママ語」とは以下のような喋り方である。

「ティアー・リン・レ・講話，キリクァラキリクァラ，ママ，食べれないお菓子。

あいもかわらず母の単語と単語の繋ぎ方が「適当」きわまりない。日本語としてはもちろん、中国語としても台湾語としても「非文」というやつである。」

温さんは大人になってから母親の言葉について愛情をもって受け入れられるようになるのだが、まだ子どもであった頃は、母親よりも日本語能力が高くなった温さんは「ママ語」に対して厳しい見方であったようだ。温さんはいう。

「おそらく、中国語や台湾語を次から次へと日本語に置き替えるようになった七歳の頃、きまじめな「翻訳家」がわたしの中で生まれてから、その思い込みは始まった。「書く」ことを覚えて以来、わたしは自分の周囲で飛び交う音という音を、「書く」に値するか否か、さながら「検閲官」のように、判断を下すようになった。日本語でない部分——わたしの場合、主に中国語と台湾語——は、「和訳」にするか、そうでなければ、「雑音」とみなして、なかったことにする・・・わたしの中の「検閲官」は、何よりもまず、母のコトバを切り捨ててしまう。」

つまり、温さんは小学校の頃、日本語だけのモノリンガルな世界へ強く傾斜していったのであろう。

温さんは13歳のときから日記を手放せなくなったという。

「自分が過ごした一日を反復する。「書く」という行為をとおして、わたしは、確かに自分のものであるはずの経験や感情を、より自分のものとして刻み付けていく。当時のわたしの日記に最も頻出した言葉は、「わたし」だ。台湾で育っていたら、わたしの日記に溢れていたのは、「わたし」ではなく、「我 (wo)」だったはず。しかし、「わたし」と心地よく書き連ねる十四歳や十九歳や二十一歳のわたしは、「我」だらけの自分の日記を想像もしない。」

冒頭で述べたように、温さんは「台湾語混じりの中国語」を聞いて育った。では、日本語以外の台湾語や中国語に対して、温さんはどのように思っているのか。温さんは高校で中国語を学んだ。そのとき温さんは、

「自分が、台湾の中国語ではなく中国の中国語を学習している。高校生の頃は、そのことがあまり気にならなかった。同じ中国語じゃないか、と思っていた。その違いが肌身に迫るようになったのは、大学に入ってからだ。」

温さんは、大学に入り、さらに中国語学習を継続する。しかし、大学の中国語の授業で温さんは日本人の教員から、温さんの中国語は台湾の中国語であって、「ふつう」の中国語ではないと訂正される。そのときの様子を、温さんは次のようにいう。

「わたしは呆然とした。「ふつう」？ わたしは昔から、その言い方を「ふつう」につかってきたというのに！ わたしは、初めて苦痛を感じた。——大学生になったらもっとがんばって中国語がべらべらになろう。実際は逆だった。大学生になったわたしは、次第に中国語を喋ることにに対して身構えるようになっていた。」

温さんは中国語の言い方だけではなく、発音にも自信を失っていく。授業で教えられる北京語と比べ、温さんの中国語には「南方の訛りがある」と思うようになった。

「十九歳のわたしは、ただ打ちのめされていた。

(わたしの中国語はふつうではない?)

自分の言葉は「ふつう」ではないかもしれない。いびつななつかしさがこみあげてくる。「幼稚園」のことを「ガッコウ」と言って相手に理解されなかったこと、「今度」と言うつもりで「ミライ」と言って周囲に通じなかったこと……。幼稚園の砂場で、どの日本語なら口にしてもいいのか混乱していた五歳のときと同じように、十九

歳のわたしは大学の中国語の授業で、どの中国語なら「正しい」のだろうかと緊張していたのである。」

実は、温さんは小学校3年生のときに家族と一緒に台湾に帰省したことがあった。そのころの温さんはひらがなやカタカナを完璧に身につけ、漢字も増えつつあり、日本語が自分の中の中心に「居座る」状態だった。台湾では、いとこたちと遊んだ。

「いとこたちと遊んでいたら、わたしだけうまく舌が廻らないのだ。中国語しか話さないいとこたちは、いつもの調子で、ぼんぼんとやりとりしている。目の前で交わされる彼らの会話は、ちゃんと理解できた。ただ即座には反応ができない。日本語が先に浮かんで来て、言いたいことがすぐには中国語にならないのだ。小さかった頃と比べて、台湾でのわたしの口数はぐんと少なくなった。」

そんなとき、遊んでいた従妹の友だちが温さんを不思議そうに見てから言った。「中国語、この子わかってんの？」

それを聞いた温さんは、

「わたしは動揺した。昔は、年上のいところを言い負かすほどじょうずに中国語が話せたのに。そんなことを、しかも年下の女の子に言われてしまうなんて。屈辱感がふつふつとこみあげてくる。

(あんたの言ってることぐらい、あたしは全部聞き取れるんだから！)

けれども、とっさにそれを中国語で組み立てることができない。わたしは、従妹の友だちを無言で見つめるしかなかった。」

幼少期の温さんは、中国語、台湾語を使って、いとこたちと遊んでいた。それが小学校3年生で、中国語よりも日本語が先に頭に浮かぶようになった。さらに、大学生になった温さんが台湾に帰省し、いとこたちと会うときにも思う。

「年上のいとこたちと向き合うとき、「退化」してしまった中国語を使うことが、余計にせつなく思えた。彼らは皆、中国語や台湾語でぺらぺら喋っていた頃のわたしを覚えているはずなのだから。」

一方、日本語についての思いも、変化していく。二十三歳のとき、突然、日本語の日記が書けなくなったという。その理由を、温さんは次のようにいう。



「十年以上、ほぼ毎日、あたかも「生まれながらの自分の言葉」であるかのように、自由自在に操っていた日本語が、ふと「外国語」のように感じられた。いや、逆だ。何故「外国人」であるはずの自分は、すらすらと日本語を書いているのだろう、と思ったのだ。その日を境にわたしは、日本人のふりをしながら、日本語を書くことができなくなった。「書く」ことに限定すれば、それは、その言語は、わたしにとって、たった一つの、自在に操ることが可能な言語である。けれども、日本語が、日本語だけが、わたしの言語なのだろうか？ たとえば、わたし、をあらわすのは、わたしの場合、日本語だけで本当に可能なのか？」（下線部は、本書では傍点）

#### 4. ことばとアイデンティティ

温さんは、これまで中国語、台湾語、日本語を使いながら、さまざまな場面で、自分のアイデンティティについて考えてきた。たとえば、「台湾総統選挙」のときに、温さんは台湾へ行き、思う。

「台湾に住んでいないわたしが、中華民国籍所持者というだけで台湾の総統を選ぶ権利を持っているのは、本当に「正しい」ことなのだろうか、と。」

また、温さんは、都内の小中学校で中国語圏から来た子どもに日本語支援をする先生をしたことがあった。そのとき中国語を話す子どもから「おんせんせいの中国語はじょうずじゃない」と言われ、「わたしは中国語をがんばるから、あなたも日本語をがんばって」と返事をした。「子どもたちは自分より子どもっぽいわたしの中国語を面白い」といいつつ、温さんは、子どもたちとのやりとりを楽しむ。一方、そんな子どもの中に、いわゆる中国帰国者の孫がいた。血統的には日本人に近い子どもが中国語を話し、血統的には台湾人なのに日本人に近い温さんは、

「日本人とは、だれのことなのか？ 日本語はだれのものなのか？」（下線部は、本書では傍点）

と問いかける。

温さんは「日本語は日本人だけのものなのだと錯覚してもおかしくない状況」の中で、自分のニホンゴを模索する日々を送る。そして、自分を「日本語を書く新しい台湾人だ。」と捉えるようになる。しかし、「日本語＝国語＝日本人」という呪縛から逃れられない。そのとき、温さんは思う。

「いつも身近にあった中国語と台湾語の響きを自分の文章の中に織り込もうと決めたとき、ようやくわたしのニホンゴは「国語」の呪縛から解き放たれたのだと思う。」

そして温さんは決意する。「わたしは、日本語を書く新しい台湾人だ。」そして、温さんはさらに思う。

「自分がこれから書き継ぐニホンゴには、わたしにつらなるまでの台湾人たちの「母語」が織り込まれていくと確信している。

——ワ・エ・ツウ・シ・リップンウエ。

(わたしは日本語に住んでいます)

記憶に向かって、わたしは耳を傾ける。もう二度と、聴こえないふりをしない。わたしの住処には、ずっと昔、日本がやってくるよりももっと前から台湾で奏でられてきた言語も鳴っている。」

温さんの曾祖父母の世代は福建省南部で話されていた台湾語を使用していたが、祖父母の世代で1910年代に台湾で生まれた人々は日本の統治下で日本語による教育を受けて成長した。しかし蒋介石率いる国民党政府が台北に中華民国の臨時政府を置いたときから、中国語が「國語」となり、温さんの父母の世代はその中国語で教育を受けた。温さんは、そんな母の言葉を振り返って、いう。

「——國語、しゃべらないと、先生ぶつ

母は、ぶつ、の代わりに、パーと言うときもあったし、打 (da) と言ったこともあった。パーは台湾語、打 (da) は中国語。だから母は少なくとも三回はわたしにその話をきかせたことになる。」

中華民国の国民教育として「國語」となる中国語が叩き込まれたのだ。

「その事実を意識すればするほど、わたしは中国語を自分のもう一つの「母国語」というのをためらう。国家によって鞭打たれながら習得せざるを得なかった言語を、人は「母国語」と呼べるだろうか？」

と温さんはいう。「移動する家族」(川上, 2014)には、ことばに家族の歴史が重なるのだ。



## 5. 考察——「移動する子ども」という記憶とその生き方

私が本書を「移動する子ども」学の貴重な研究書であると思ったのは、以上のように、幼少期より複数言語環境で成長した子どもが大人になるまでに複数言語にまつわるさまざまな思いが詳細に述べられているからである。引用した箇所は紙面の都合でほんのわずかであるが、温さんの思いはまだまだ深い。

最後に、本書が「移動する子ども」の研究としてどのような意味があるかについて考えてみよう。

第一は、本書で詳細に記述されている温さんの思い出やそれにまつわる感情や考えには、幼少期より複数言語環境で成長し、言語間、空間、言語教育カテゴリー間を移動した子どもにとって重要な意味のある記憶が刻まれているという点である。自分の過去の体験や思い出、そのときの感情や思いを、後から振り返って考え、自分の中に「意味ある経験」として記憶に残していく作業が本書の全体に流れている。その意味で、本書は「移動する子ども」という記憶を考えるうえで、貴重な事例集なのである。

第二は、その幼少期より複数言語環境で成長したという体験への意味づけが成長過程で変化していくという点である。さらに言えば、それは家庭だけではなく、社会的な文脈において、たとえば、学校、中国語（北京語）学習、台湾訪問などの社会的な場面で、温さんの年齢や考え方に応じて変化していくという点である。その典型が、「ママ語」への考えや、自分の中国語や台湾語への省察である。「移動する子ども」という記憶には、動態性があるということである。

第三は、温さん自身がことばを複合的なものとして捉えている点である。人格心理学でいう、幼少期の言語によって形成される「言語自己感」（大山，2015）が成長にともなって変容していくように、温さん自身のことばの捉え方が変化していく。本書で最も好例なのは、「ママ語」に対する温さんの気持ちの変化である。母親のコトバは常に、中国語、台湾語、日本語が混ざっているという。日本語以外は雑音とみなしていた温さんは、「今では、母や祖母のコトバを雑音とみなすのではなく、むしろ、ほかでもない自分の日本語の一部として織り込むことを楽しんでいる。」と述べる。本書には、母親の発言が随所に出てくるが、ところどころに、「実際は、中国語、台湾語、日本語が入り乱れていますが、便宜上、日本語に統一しています」と注を入れている。

温さん自身、カタカナや漢字を織り交ぜた文章を書く。

「でも、カタカナやピンイン、そして簡体字や繁体字といった中国語の漢字を織り交ぜた文章は、少なくとも書いている本人であるわたしにとって、最も自然なニホン語なのだ。」

この「ママ語」も温さんの文章作成も、*metrolingualism* (Pennycook & Otsuji, 2015) の観点から見れば、至極自然な言語使用であるといえよう。また、温さんは、ことば自体の捉え方につ

いて、次のようにいう。

「そもそも、中国語と台湾語と日本語と、ひとつずつ数える必要はないのかもしれない。三つの母語がある、というより、ひとつの母語の中に三つの言語が響き合っている、としたほうが、自分の言語的現実をびたりと言い表わせるのではないか。考えてみればわたしは、中国語や台湾語を外国語として、というよりは、自分のニホンゴの一部のように感じている。わたしはもう、母たちの声を「和訳」しない。むしろ、記憶に向かって耳を凝らし、日本語として発せられたのではない音をたぐりよせる。」

これは、人の中にある多様な言語能力が「複雑で不均質だとしても全体としてひとつのもの」と捉えられる複言語複文化能力（コスト他，2011）であり、その言語使用は常に動的であり、その実態は *translanguaging*（Garcia & Li Wei, 2014）の考え方で捉えることができる。

第四は、自分の使用するコトバに歴史性を感じる点である。温さんは自分の使用する中国語について、次のようにいう。

「中国人には「南っほいね」とからかわれ、台湾人には「日本人っほいよ」と笑われ、中国語が堪能な日本人には「でたらめだなあ」と苦笑される自分の中国語を、わたしはとても自慢に思っている。なぜならわたしの中国語には、台湾で生まれて日本で育った自分の時間が刻まれていると思うから。わたしに限ったことではないだろう。言葉とは、もともとそういうものなのだ。」

台湾・馬祖で開催された日本・台湾・タイの三ヶ国合同映像ワークショップで小説家として日本語と中国語を織り交ぜてスピーチをしたとき、温さんは思う。

「これがわたしのコトバだ。いや、このコトバがわたしなのだ。

台湾人なのに中国語ができない。日本語しかできないのに日本人ではない。

ずっと、それをどこかで恥じていた。けれども、そうであるからこそ、わたしはわたしのコトバと出会うことができた。」

このように、人のことばにはその人やその家族の歴史が刻まれているのである。

第五は、このような複言語複文化能力が人の生き方に影響していくという点である。温さんの場合は、小説を書くことを生業としていく。「わたしは、日本語を書く新しい台湾人だ。」と思うと同時に、「台湾人でありながら日本人でいたい。」（下線部は、本書では傍点）と思う。そして、温さんは自分の記憶から生まれる物語を、「わたしの回想の仕方次第で、それは異なる物語になり得ることを示すかのように」感じ、小説を書くという方法にゆだねていく。だからこそ、「わたし

は小説を書いていたというよりは、自分が経験したことを、自分ではないだれかに生き直してもらうために、小説という形式を借りていた気もする。」

「わたしは、日本語を書く新しい台湾人だ。」と思うからこそ、「文学が証明しようのない複数の真実に光を照らすものである限り、わたしもまた文学なしではいられない。」と小説家としての思いを綴る。

本書は、まさに「移動する子ども」という記憶とその生き方についての自己エスノグラフィックな「学術的研究書」なのである。

#### 参考文献

大山泰宏 (2015) 『人格心理学』 放送大学教育振興会.

川上郁雄 (2014) 「ことばとアイデンティティ —— 複数言語環境で成長する子どもたちの生を考える」 宮崎幸江編『日本に住む多文化の子どもと教育 —— ことばと文化のはざまで生きる』 上智大学出版. pp.117-144.

川上郁雄編 (2013) 『「移動する子ども」という記憶と力 —— ことばとアイデンティティ』 くろしお出版.

コスト, D.・ムーア, D.・ザラト, G. (2011) 「複言語複文化能力とは何か」 (原文は 1997 年, 姫田麻利子訳, 『大東文化大学紀要〈人文科学編〉』 第 49 号, 249-268)

Garcia, O. & Li Wei (2014) *Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Pennycook, A. & Otsuji, E. (2015) *Metrolingualism: Language in the City*. Oxon: Routledge.